

ヒュームの「人間の学」について

萩 間 寅 男

問題の所在

ヒュームの「人間の学」の構想についてはいろいろな説が主張されている。小論において論者は、伝統的なヒューム哲学に対する接近法を概観して、先ずヒューム哲学の全体像を確認した上で、ヒュームがいう「人間の学」とは一体いかなるものであるかを解明することを試みる。

I

ヒューム哲学にかんして伝統的に取り上げられてきたいくつかの問題のうちで、その哲学の理解の根本にかかわる二つの問題がある⁽¹⁾。第一はヒュームが青年期の哲学著作の不評に、哲学を放棄し、政治・社会・歴史研究に中年期以降専心したのではないかという疑問である。第二にかれは哲学を放棄しなかったが、最晩年に処女作『人性論』を否定し、中年期に用意した『人間知性研究』以下の著作を、自己の「哲学的心情と原理」(4:2)を代表するものであると主張するに至るが、一体どちらをヒュームの哲学上の主著とみなすべきであるか、またこのような主張の根拠ないし動機はいかなるものであったかという疑問である。

第一の疑問にかんしては、少なくとも外在的な証拠が解決を与える。そもそもこのような疑問はヒュームが「歴史家」として著名であった十八世紀中葉から成立したものである。つまりヒュームは生前に「歴史家」として知名となり、その没後約百年間その哲学著作は殆ど出版されず、そして十九世紀末以来反対に「歴史家」ヒュームは忘却され、「哲学者」ヒュームが復活するのである。そのような事情とその生前の歴史著作の好評と社会・政治研究の名声は、「文筆での成功」が自分の「推進力」であったというかれの『自伝』(5:xxxiii)における言明とがあいまって、かなり久しい間ヒュームは哲学を放棄したという理解が、またはその哲学は「文筆での成功」のためのものという理解が生み出された。しかし実際は、『人性論』の不成功の約十年後に、ヒュームは数点の哲学著作を出版する。すなわち『人間知性研究』(1748年初版)、『道徳原理研究』(1751年初版)であり、これらは『著作集』(1753-4年初版)⁽²⁾に収められ、やがて別に『四小論集』(1757年初版)⁽³⁾として出版されたもののうちの『情念小論』と『宗教の自然史』とが併せて収録され、それら四点を一巻にした二巻本の生前最後の『著作集』(刊行は没後の1777年)に前

述の言明を含む『緒言』を添付する。この『著作集』は上述のものを含めて生前に都合十一版を重ねたが、それらにヒュームは絶えず加筆修正を行っていたのであるから、かれの関心がその生前に決して哲学から離れたことがないのは確実である。また、『自然宗教にかんする対話』を略1751-6年に完成し、1761年前後に加筆し、さらに1776年すなわちその没年にも手を入れていたといわれるように、ヒュームが宗教論にも目を向け続けていたことも確実である(3: v)。したがって、問題はかれが哲学を放棄したか否かではなく、内在的に、一体『著作集』の残る一半を占める政治・社会論評やきわめて多くの重版をした歴史著作⁽⁴⁾とが、一体その哲学とどのような関係をもつのかという点にあることは明白である⁽⁵⁾。

第二の問題は、従来はたしてそれに値する十分な検討を与えられてきたとはいえない論点である。

ヒュームがその哲学に長い間、周到に思索をめぐらしてきたことは、既にみたことで十分窺い知ることができる。『自然宗教にかんする対話』の出版が、外的情況についてのかれ自身の判断の結果、遅らされたと考えうることであるが、ヒュームが『人性論』でなく、『人間知性研究』以下の著作を、その「哲学的心情と原理」とをよく代表する著作であると判断するのであるから、われわれとしては内在的に、一体いかなる意味において『人間知性研究』以下の著作が『人性論』に優れているかを解明しなければならない。

ヒューム自身の言葉によれば、『人性論』には「論考においていくつかの過失があり、表現においてなお一層のそれ」(4: 2)があったのであり、また「内容よりも様式」(5: xxxv)に失敗の原因があったとされている⁽⁶⁾。上の二つの言葉は、ともにその最晩年のものであり、いわんとするところは同一であるとみなせよう。一般に後の言葉のみが注目され、ヒュームは『人性論』の「内容」に問題をみなかったと解されているが、実はそうでなく、「内容」ないし「論考」に不備があった。ただし「様式」ないし「表現」にさらに一層の欠陥があったとかれは明言しているのである。

しかしながら、このようなヒュームの明言にもかかわらず、かれの二つの哲学的立場に差異を認めない見地は根強い。例えば最近の研究者の一人は、『人性論』と『人間知性研究』以下の著作とを対照して、「前者が哲学的真理を樹立するのを旨としたのに対して、後者は既に樹立された真理の一部を目をひく、しかしあまり衝撃的でない仕方で示すことを狙った」(9: 9)と主張する。つまり「青年の客気」が横溢する処女作に対し、後年の著作には「諧謔的超然」(9: 9)が存するとみなし、あくまで「様式」ないし「表現」の差異に帰する見解をとっている。

が、一步立ち入って「内容」をみてるならば、両者の差異をあくまで「様式」ないし「表現」に帰する見解は崩壊する。

後年の著作四点は、内容的には必ずしも正確に『人性論』全三編に対応しないことは、既に触れたとおりである（4：xiff）。大きくとらえれば、四点中後に出版された『四小論集』中の二点は、先行作に対応する内容を持たない。『宗教の自然史』は全く新しい内容である。それと同時に上梓された『情緒小論』は、『人性論』第二編の内容に対応するかにみえるが、本来重要と目された箇所、すなわち愛と憎しみ、自負と自卑についてなど、情緒の仕組みについての論考などを抄略し、第三編への導入部となっていた共感の議論、また理知と情緒との関係にかんする議論が殆どすべて省かれ、重要な議論が皆無というべき無内容なものに書き直されている。別の視点をとるならば、観念間と印象間との二重の関係というヒューム哲学における最もニュートンの原理に依拠した説明が削除されているのである。

時間的には中間に刊行された『道徳原理研究』と、先行する『人性論』第三編との関係も不明確である。むしろセルビ＝ビッグの指摘するように「全く書き直された」（4：xxiii）とみなすべきである。その根拠は、『人性論』第三編においては、第二編をうけて、すべてを「一層一般的で基本的な原理」に帰するのに対して、『道徳原理研究』においては、そのような方法は用いられてはいない。かえって、「単純化の愛好は、今までの哲学における多くの間違った論考の源であった」（4：298）として、安易に一般的原理に依存することを厳重に戒しめる 今までになかった視角がみられる。「人間の心の普遍的原理」（4：272）としても、従来の共感などの社会的感情の代りに、「人間愛の感情」が主張されている。

『人性論』第一編と『人間知性研究』とはまた顕著な内容の相異を示す。第一編から、時空論や自己同一性についての議論など抽象的な議論が抄略され、代りに、自由と必然についての議論が第二編から移され、全体として心理主義的議論を排した因果論に焦点を合わせた構成に模様替えされる。

全体としてこのような異同を目にして、なお『人間知性研究』以下の著作は、ただ単に『人性論』の「表現」または「様式」の不備を是正するために書き直されたものであると主張することは可能であろうか。

確かに後年の著作は、「青年の客気」を横溢させた『人性論』を改良し、「諧謔的超然」といわないまでも、冷静沈着な議論の展開を示している。しかしながら上にみたような内容の異同の事実、ヒュームが「内容」または「論考」に不首尾があり、それを改良訂正するために、多大な労力と時間をかけて筆をとったとみることをより支持するであろう。

「青年の客気」につき動かされて主張し、後年にそれを不本意とした「内容」ないし「論考」が、一体いかなるものであったかは、既にみてきたことから大凡窺い知られる。つまり、すべてを「一般的基本的原理」に還元しようとする方法に対して、後年において明らかにヒュームは大いに疑問を抱くようになっている。それよりも自己同一性や実体についての議論は、「ただ信じ

こまれているだけの原理，こうした原理からつじつまも合わせず導き出された結論」(7 : xiii) であって，かれの「哲学的心情や原理」とは相容れないものではないかという認識を，かれは『人性論』序論というある早い時期から有つにに至っていると考えられる。かれのこのようないわば反省を根本に，自己の「哲学的心情や原理」に忠実に構想されたのが，『人間知性研究』以下の著作であると理解するのが妥当である。つまりヒュームにとって哲学上の主著は，断固として後年の著作なのである。

ただし，ここで注意すべき点は，今述べたヒュームのいわゆる反省が，実に『人性論』序論というきわめて早い時期に到達されたものであると考えられることにある。この点は，早くケンプ・スミスが『人性論』は第二，三編が先行して完成されたという主張したことに関連している(7)。ケンプ・スミスによれば，ヒューム哲学はハッチソンの影響の下，道徳論から先に完成された。この理解のみが，第一編と第二編における，自我の取扱いの相異，観念連合の取扱いの差異，さらに序論における道徳哲学者たち，つまりマンデヴィル，シャフツベリ，ハッチソン，パトラーなどへの言及を説明するというものである(12 : vi)。そうであれば，『人性論』序論はおそらく，ヒュームのきわめて早い第二・三編執筆時の考想と第一編執筆時のそれとを混在させていると見るべきであるが，それにはケンプ・スミスは触れない。

それはともかく，『人性論』第一編と第二・三編が，異なった認識の下に書かれたことを示す証左は，第一編の結論部と第二編の結論部にある真理または学的態度の差異に見られる。

第二編の結論において，ヒュームは哲学に伴う情緒は，狩りに伴う情緒ないしは勝負事のそれと同類であると主張している(7 : 451-2)。つまり「研鑽の快は主として心的活動に，いかえれば真理の発見ないし了解に際しての天稟及び知性の行使に存する」という説である。これに対して，第一編の結論部においてヒュームは「熱しやすい想像が哲学に参加することを許され，諸々の仮説がもっともらしくかつ快適であるためのみに奉じられているあいだは，日常の実践・経験に適すると思われるいかなる原理も意見も決してあることはできないのである」(7 : 272)として，「少々の土臭い混ぜ薬こそ，通常はそれらの体系が必要とするもの」(7 : 272)

であるから，この混ぜ薬を添加することを推奨する。すなわち，第二編においては真理は自己目的的に追求されたのに対し，第一編においてはそれらは日常の実践・経験という基準を適用される。ただ攻究のために攻究された真理はもはや無益であり，「日常経験」という「土臭い混ぜ薬」が添えられなければならないというのである。

『人性論』第二・三編は，根本的に一般的原理に還元する態度が横溢しており，それに対応し，真理はいわば自己完結的に存するとみられたのに対し，第一編においては一般的原理は認められず，代りに，日常経験の基準の一つ毎に適否を審査される「土臭い」真理が立てられている。

ヒュームが，一体いつ『人性論』の「内容」ないし「論考」の不備を認識したかについて断定

することは困難であるが、上にみたような明確なヒュームの態度の差異を確認するならば、それはかなり早い時期つまり『人性論』執筆時、その後期または完成直後か、もしくはかれのいう「余りに早く出版した」(4:2)のその取り返しのつかない出版の過程においてであろう。が、いまここで重要な点は、『人性論』第一編が、第二・三編の後に完成され、先行部分の修正改善をはかっていることであり、それはかれの後にいう「哲学的心情と原理」を代表するものであるということである。

II

視角を変え、ヒュームが一体学ないし諸学の体系をいかなるものと理解していたかを解明してみよう。

知性と情念、道徳、政治論、批評をもって「人性論」の体系が成立するとする一方で(7:xii)、そのような体系に「人間の学」という名称を与える(7:xiv)。ここで、先ずヒュームのとらえた「人間の学」の実相を解明することから始めたい。

ヒュームは「人間の学 science of man が他の諸学問にとっての唯一の確固とした基礎」であり、「重要な問題で、人間の学のうちにその解決が含まれていないようなものは一つとしてない」ゆえ、「人間本性の原理を明らかにしようと試みることで、実際は諸学問の完全な体系を目ざしている」(7:xvi)と主張し、直接に「人間の学」すなわち人間本性の原理の解明に進むことを提案している。しかしながら、ヒュームが、一体いかなるものとして、「人間の学」殊に学ないし学問 science, sciences を把握しているかは必ずしも判明でない。

ヒュームによれば、「あらゆる学問は多少なりとも人間本性に関係していることは明らか」で、「数学、自然学、自然宗教さえ、『人間』についての学問 science of Man に依存している」とされる。なぜならば、「これらは人間の審理権のもとにあり、人間の権限、機能によって裁定される」からであり、「もしわれわれが人間の知性の及びうる範囲と力とをあますところなく知り、推論に際して用いる観念の本性、われわれがそのときに働かせる作用の本性を明らかにできれば、これらの学問は大いに改善し進歩するといひ(7:xv)、「人間の学」の課題がなによりも「人間の知性の及びうる範囲と力とをあますところなく知り…われわれがそのとき働かせる観念の本性、作用の本性を明らかにすること」にあるとしている。つまり「人間の学」とは、心の学問であるという見地を示しているのである。

しかしながら、この定義した「人間の学」に対して、すぐ後において論理学の名を与え、より広い内容をもつ「人間の学」をヒュームは定義する。「数学、自然学、自然宗教が人間についての知識にこれほど依存するのなら、人間本性ともっと固く結びついている他の学問においては、どれほど期待を寄せることができようか」として、論理学、道徳、批評、政治論における改善進

歩にヒュームは期待していた。論理学は「われわれの推論の機能と作用、およびわれわれが持っている観念の本性を明らかにすることをもっぱら目的とし」、道徳と批評とは「われわれの好みと心情にかかわり」、政治論は「結合して社会を作り相互に依存し合うものとしての人間を考察する」(7: xv-xvi)。つまり「人間の学」ないしは「人性論」は、われわれが政治的社会的存在として「知っておかざるを得ないようなもの、もしくは人間の心を改善するか、心にいろどりを添えるのにあづかるようなもの」(7: xvi)を指すのである。

このような「人間の学」であるが、一体いかなる意味において学ないし学問と称されるのか、ヒュームは判明にしていない。なぜならば、学ないし学問には、広義に学芸をおさめること、まなぶことと、そして勉強して得る教養や知識を意味する用法と、ある原理に従って組織された知識の体系を意味する用法がある。後者には、普遍的な学科としての用法と特殊的専門的な学科としてのそれがある。今日われわれに親しまれている語義は、後者のそれであろう。すなわち学とは一定の原理または法則によって構成される知識の体系の意である。しかしながら、注意しなければならないことは、このような学の語意はきわめて新奇なものであって、十七・八世紀において、そのような語義を表現するためには、一般に哲学 *philosophy* の語を用いたのであったことは、OED の指摘するところである。つまり、ヒュームが「人間の学」と称するとき、われわれが今日において了解するある原理に基いて組織される知識の体系というものを、かれが指していると理解することは、きわめて困難である。

既にみたように、ヒュームはあたかも体系的な学を構想したかのごとくに言明していた。確かに、『人性論』緒言は、「知性と情念とはそれだけで一連の論究としてまとまり」、道徳、政治論、批評論を吟味し、「それでこの人性論は完成する」(7: xii)と告げる。『人性論』序論は「まっすぐに進軍してこれらの諸学問の首都、中枢に、つまり人間本性そのものに迫ること」で、「人間本性の原理を明らかにしようと試みることで、実際は諸学問の完全な体系を目ざしている」(7: xvi)と言葉は続けられるが、それらは明確に、「人間本性の原理」に従って組織された知識の体系の構築の意図を明示するかに思われる。しかしながら、これらの言葉は、「最も高名な哲学者の体系においてさえ、いたるところで目につく」「ただ信じこまれているだけの原理、こうした原理からつじつまも合わせず導き出された結論、各部分の間の整合性の欠如、全体における明証性の欠如」があり、そして「諸学問の不完全な現状を知るのにそれほど深い知識を持つ必要もない」(7: xiii)実状を確固と認識した上で述べられているものであることに注意しなければならない。

一般的基本的原理に従って組織される知識の体系の構築は、ヒューム哲学においてきわめて早い時期、すなわち『人性論』第二、三編が執筆されている時期にかれの念頭に浮んだことは否定できない。観念間と印象間との二重の関係(7: 286)を、情緒論の根本の原理として、情緒の生

起する過程を説明しようとしたことは事実である。しかしながら、このような立場は、『人性論』全体においても特異である。先にみたように、『人性論』は第二、三編が先行して完成されたと考えられるが後に完成されたと考えられる第一編は、一般的基本的原理の確立に対して大いに懐疑的である。むしろ、ヒュームの因果論はそれを否定しているとみるべきである。

それはさておき、ヒュームが一体どういう意味で学は成立するとみているか把握することを試みたい。そのためには、まず一体学がいかなる現実の下にあると、ヒュームが認識しているかを確認しよう。

「幾度の長い中断と、強力な妨害のともなった二千年は、諸学にいささかでも肯ける完璧さを与えるには短い時間である。おそらく、我々はなお世界の年齢としては、末世の検討にたえるなんらかの原理を発見するには若過ぎる時代にいる。私個人としては、唯一の希望は、哲学者の思弁にいくつかの点で異なる傾向を与え、そして保証と確信とを期待できる主題だけを、今まで以上に判明に指持して知識の向上にいささかでも貢献したいのである。」(7:273)

学の進歩は遅々としており、われわれがそれに大きな改良を与える望みは未だないというのがヒュームの認識である。そのような認識がかれにおいて確固としたものであったことは、『人性論』の第四編とも考えられる、『道徳政治論集』に収められた「市民的自由について」という小論において、

「子々孫々の末代まで変わることなく真であるような普遍的な真理を、政治の領域において多数樹立するには、人間世界の閲してきた年月は依然として余りに僅かではないのではないかとことです。われわれ人類は未だに三千年の経験すら積んでいません。ですから、他のあらゆる学問と同じく、この学問においても推論の能力は未完成であるだけでなく、推論の能力を働かせ得る素材にかんしてさえ十分な素材をわれわれは手にしてません」(5:87-8)

と、ほぼ同じ主旨を繰返していることから窺い知られる。この確信は、また約十年後の『人間知性研究』においても繰返し表明される。

「学問と哲学とが初めて生れて以来、多大の熱意をこめて論議と論争とが重ねられてきた諸問題において、当然期待されてよいものは、あらゆる諸術語の意味が少なくとも論争者からの間では一致しておるべきであり、かつ二千年を経過するわれわれの研究が、言葉を離れて論議の真の主題に迫るべきであるということである……

論議が長期にわたって続けられ、そして依然として未決定のままであるという事態から、まさしく認められることは、表現のうち何らかの曖昧なところがあって、論争者たちが論争中に用いられる術語に異った観念をおしあてているということである」(4:80)

つまり『人性論』序論において述べられた学の現状そしてその原因についての認識は、ヒュームにおいて全く一貫したものであり続けたのである。

それでは、二千年にわたりいわば足踏みをしてきた学に対して、一体いかなる方法で改善ないし改良をヒュームははかろうとしているのであろうか。

学に、現実の状況をもたらした事情としては、

「かれらはしばしば何らかの一般的原理を求めるその熱意のあまり、事柄をあまりに遠大に進展してきた」(4:15)

ことに、ないしは、「哲学における多くの誤まった論考の源泉であって来た単純化の愛好から発してきたと思われる」(4:298)のであるから、ヒュームが提案する方法は、われわれが日常の経験にてらして、それらの論考が「熱しやすい想像」ないし「もっともらしくかつ快適であるためのみに奉じられている仮説」(7:272)でないことを検証するしか外にない。この「日常の経験」という「少々の粗雑な土臭い混ぜ薬」こそが、われわれに「少なくとも人間の心が納得でき、かつ最も批判的な検討の検査にたえられる体系ないし一組の意見を樹立する希望」(7:272)を与えるものである。

であるならば、ヒュームにとって、可能である学とは、「一組の意見」でしかない。それは、「最も批判的な検討の検査」にたえられるものであるが、一体どれほどの時間をたえうるかは、既にみたように、われわれの知らぬところである。そもそもが、われわれにとって「推論の能力を働かせうる素材にかんしてさえ充分な素材をわれわれは手にして」ないからである。

もしこのような見方が成り立つならば、では、一体、

「人間本性は人間にかんする唯一の学である」(7:273)

とはいかなる意味で了解されるであろうか。ここでいわれる学とは、通常われわれが解する学問、現実にかんする専門の学科を指しているのではないことは明白である。代りに、それは修養として、「知識の向上」にいささかでも資する、むしろ「ともかくわれわれが知っておかざるを得ないようなもの」を意味する。つまり、われわれが「人間本性」を学び修めることで、「諸学問の完全な体系を目ざしている」といいうるのである。ヒュームにとって、学とは何にまして、このような「心を改善するか、いろどりを添える」ものであったのである。

注

- (1) ヒューム哲学の極端ともいべき多様な理解については、ノクソン(11:165f)を見よ。
- (2) *Essays and Treatises on Several Subjects*.

- (3) *Four Dissertations*, 1757. *The Natural History of Religion, Of the Passions, Of the Tragedy, Of the Standard of Taste* を収録。
- (4) 『英国史』は初め『グレート・ブリテン史』*The History of Great Britain*, 2 vols 1754/57 として出版され、1762年に *The History of England*, 6 vols として完成した。また、政治・社会論評は初め *Essays, Moral and Political*, 1741 として出版され、諸論稿の追加削除を経て、*Essays, Moral, Political, and Literary*, 1758 として『著作集』に収められる。
- (5) ヒューム哲学の全体性を注目する数少ない著作としてフルー(2)がある。
- (6) これら二つのヒュームの最晩年の言明に注目した数少ない研究の一つとしてノクソン前掲書(11:54)。なお、最晩年のヒュームの言動については(6:ii, 301)(9:582, 591)
- (7) ケンプ・スミスの主張にかんして従来十分な注意が払われたとはいえない。最近のノートンはヒュームのハッチソンからの感化を否定する点で、それに触れるのみである(10:48ff)。

文献 引用の数字は初めが、文献表の番号、後が頁数を示す。なお邦訳のあるものは、著論者の判断で適宜変えた。責任は論者が負うものである。

1. Flew, Antony. *Hume's philosophy of belief*. London: Routledge, 1961.
2. do. *David Hume: philosopher of moral science*. Oxford: Blackwell, 1986.
3. Hume, David. *Dialogues concerning Natural Religion*. Edited by N. K. Smith. Second edition. New York: Bobbs-Merrill, 1947.
4. do. *Enquiries concerning Human Understanding and concerning the Principles of Morals*. Edited by L. A. Selby-Bigge. Third edition by P. H. Nidditch. Oxford: Clarendon, 1975.
ヒューム 福鎌達夫訳『人間悟性研究』 彰孝書院 1948.
5. do. *Essays, Moral, Political, and Literary*. Edited by Eugene F. Miller. Indianapolis: Liberty, 1985.
ヒューム 小松茂夫訳『市民の国について』 岩波文庫 1982.
6. do. *The Letters of David Hume*. Edited by J. Y. T. Greig. 2 vols. Oxford: Clarendon, 1932.
7. do. *A Treatise of Human Nature*. Edited by L. A. Selby-Bigge. Second edition with text revised and variant readings by P. H. Nidditch. Oxford: Clarendon, 1978.
ヒューム 大槻春彦訳『人性論』 岩波文庫 1948.
8. Jessop, T. E. "The Misunderstood Hume", in *Hume and the Enlightenment: essays presented to Ernest Campbell Mossner*. Edited by William B. Todd. Edinburgh: the University Press, 1974. pp. 1-13.
9. Miller, David. *Philosophy and Ideology in Hume's Political Thought*. Oxford: Clarendon, 1981.
10. Mossner, Ernest Campbell. *The Life of David Hume*. Second edition. Oxford: Clarendon, 1980.
11. Norton, David Fate. *David Hume: common-sense moralist, sceptical metaphysician*. Princeton: University Press, 1982.
12. Noxon, James. *Hume's Philosophical Development: a study of his methods*. Oxford: Clarendon, 1973.
13. Smith, Norman Kemp. *The Philosophy of David Hume: a critical study of its origins and central doctrines*. London: Macmillan, 1941.